

長作堤防と開田



【ナレーション】

むかし、むかし、江戸時代の終わりのころ、遠野の高室(たかむろ)地域、いまの土淵(つちぶち)一帯は、作物があまり育たない所でした。

そこに長作(ちょうさく)という青年がいました。

【長作】

「もっとたくさん田んぼを作れば、わたらの暮らしは楽になるはず。」

【ナレーション】

そう考え、自分で新しく田んぼをつくりだし、一生懸命働いておりました。

そして、人を雇ったりもしてお米をつくるようになり、長作の家は、次第に豊かになっていきました。

長作堤防と開田



【ナレーション】

長作は、34歳のころ遠野城下に下りてきて、来内川(らいないがわ)の河原に家を見て住みはじめました。

しかし地元の人には笑いながら

【村人 A】

「おまえさん、このあたりは洪水の多いところだ、家を建てても無駄だぞ。」

【長作】

「そうかなあ。わしはそうは思わんがね～
川の流れや地形からしてここは安全だと思うよ。
それに、わしはここでやりたい仕事があるのさ。」

【ナレーション】

長作の言ったとおり、大雨で川が氾濫しても長作の家はいつも無事でした。

【村人 B】

「あの人は、たいしたもんだ…」

長作堤防と開田



【ナレーション】

そして長作は、来内川から水を引いて水車小屋を建てたのです。

お米を精米する仕事をはじめたのでした。

長作の予想どおり、地元の人たちがどんどんおとずれ仕事は繁盛しました。

【村人C】

「長作さん助かるわ。今まで精米所は山のふもとにしかなかったから、こんな近くでできるなんて夢みたいだ。」

【村人D】

「いやーたいしたもんだ、この川の流れを利用して水車を回すなんて頭がきれるのう。」

【ナレーション】

長作はみんなが喜んでくれて嬉しくなりました。

それから水車小屋をもう2つ作り、ますます忙しく働いたのです。

長作堤防と開田



【ナレーション】

長作の合理的で実行力のあるところを見抜いた遠野南部家の家臣・百専右工門(ももせんえもん)は、ある日、長作を呼び出しました。

【百専右工門】

「青笹(あおざさ)に農業用のため池をつくることにしたのだが、現場の責任者をやってくれぬか？

これにより田んぼに安定した水の供給ができるようになるのだ。」

【長作】

「素晴らしいお考えですね、百専右工門様。ぜひ協力させてください！」

【ナレーション】

長作はリーダーとして積極的に働きました。荒地が田畑に生まれ変わる様子を見て、

【長作】

「すごい、土地が豊かになれば人もイキイキしている！村全体が元気になるようだ！」

【ナレーション】

長作はこの体験で工事の知識ややりがいなど多くを学んだのです。

長作堤防と開田



【ナレーション】

しかし数年後、天候が悪く、米のとれない年がありました。次の年も不作が続き、農民たちは食べる米がなくなり、弱って死んでいく者もいました。

【長作】

「これではいかん！少しでも田んぼを増やして食べる米を確保しなくては...
しかし農地をつくるには広い土地が必要だ。どこにもそんな土地はない。どうすればいいんだ。」

【ナレーション】

長作は考え悩みました。そして近所の猿ヶ石川のほとりの広い荒地を思い出したのでした。

【長作】

「あそこは水害でいつも水びたしになる。でももし川の水が来なければ...広い農地を確保できるんじゃないだろうか？
そうだ！あそこに川の水をせき止める堤防を作ろう！」

【ナレーション】

そう思いついたのです。

長作堤防と開田



【ナレーション】

それからというもの、長作は道路や川筋を歩き回り、ゴミや木くずなどを拾い集めては猿ヶ石川に運びました。

その上に大ツブの砂をかけ、小さな丘を作って少しずつ大きくしていったのです。

しかし一人の力ではなかなか仕事は進みません。人手をかけて工事をするにはお殿様の許しが必要でした。

でも当時は、農民がお殿様に話をするなんてとても考えられないことでした。

【長作】

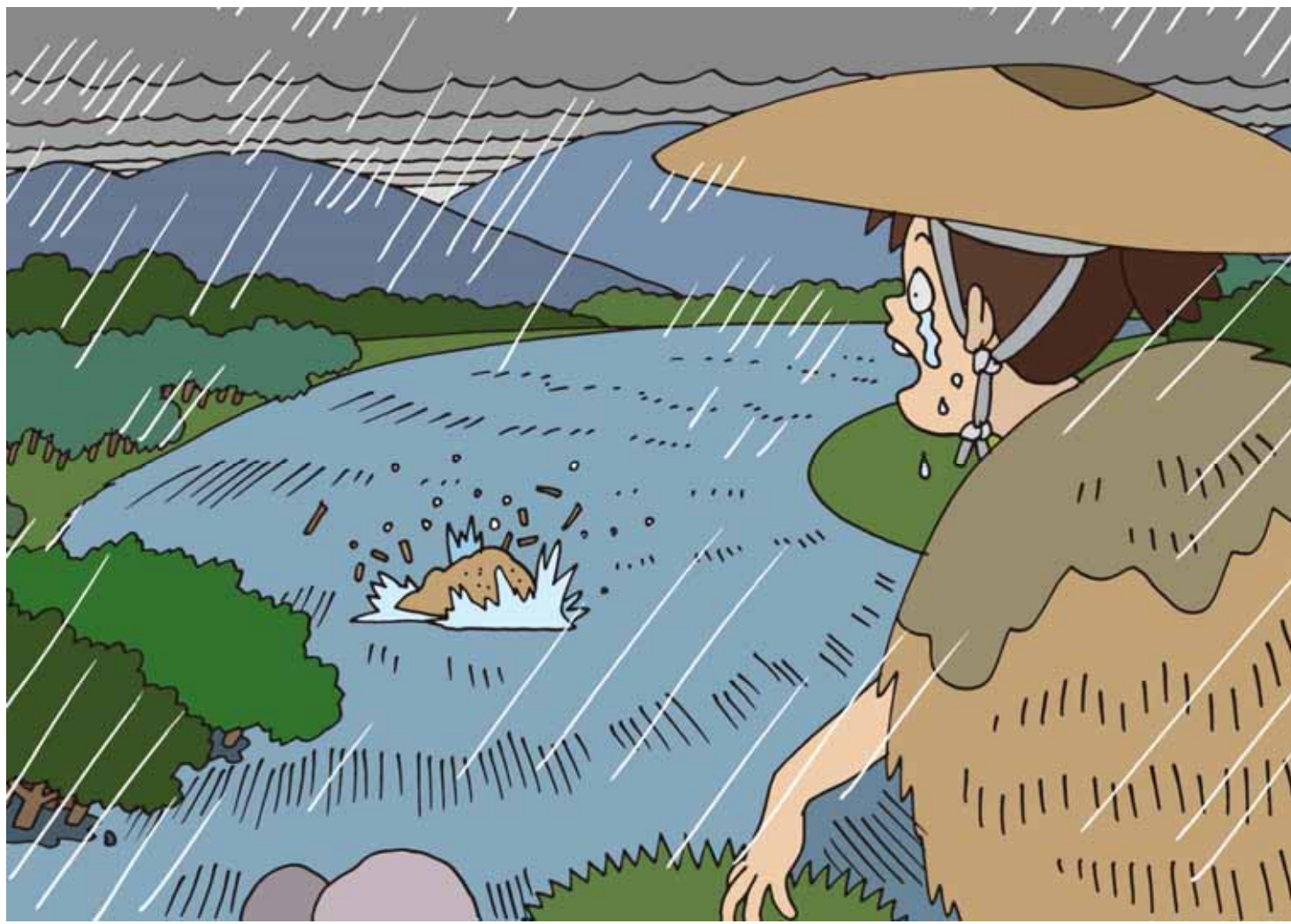
「コツコツやれば、堤防はいつかきっとできる！」

そうすれば田んぼがたくさんできて皆の暮らしが楽になるはず！」

【ナレーション】

そう自分に言いきかせるのでした。

長作堤防と開田



【ナレーション】

ところがある日、大雨で猿ヶ石川は氾濫し、何か月も毎日かよって作った長作の堤防は、あっさりと流されてしまいました。

【長作】

「今までがんばったのに、また一からやりなおしだ…

そのうえ、また雨が降ったら流されるかもしれない。

もうダメだ。」

【ナレーション】

長作はショックで、仕事がぜんぜん手につかなくなりました。

困った長作は遠野南部家家臣の四戸養左工門(しのへ ようざえもん)の門をたたき、これまでのいきさつを相談したのです。

長作堤防と開田



【ナレーション】

話を聞いた養左工門は

【養左工門】

「なんと、おぬし一人でそこまでやっていたとはおどろきだ。

今回のこともさぞかし落ち込んだことだろう。

よしわかった、わしからお殿様にお願いして工事の許しをもらってやろう。」

【長作】

「本当ですか四戸様。」

【養左工門】

「本当だ。それと、これからは四戸を名乗るがよい。我が家の使用人ということだな。そのほうが工事の時、人を雇いやすいであろう。」

【長作】

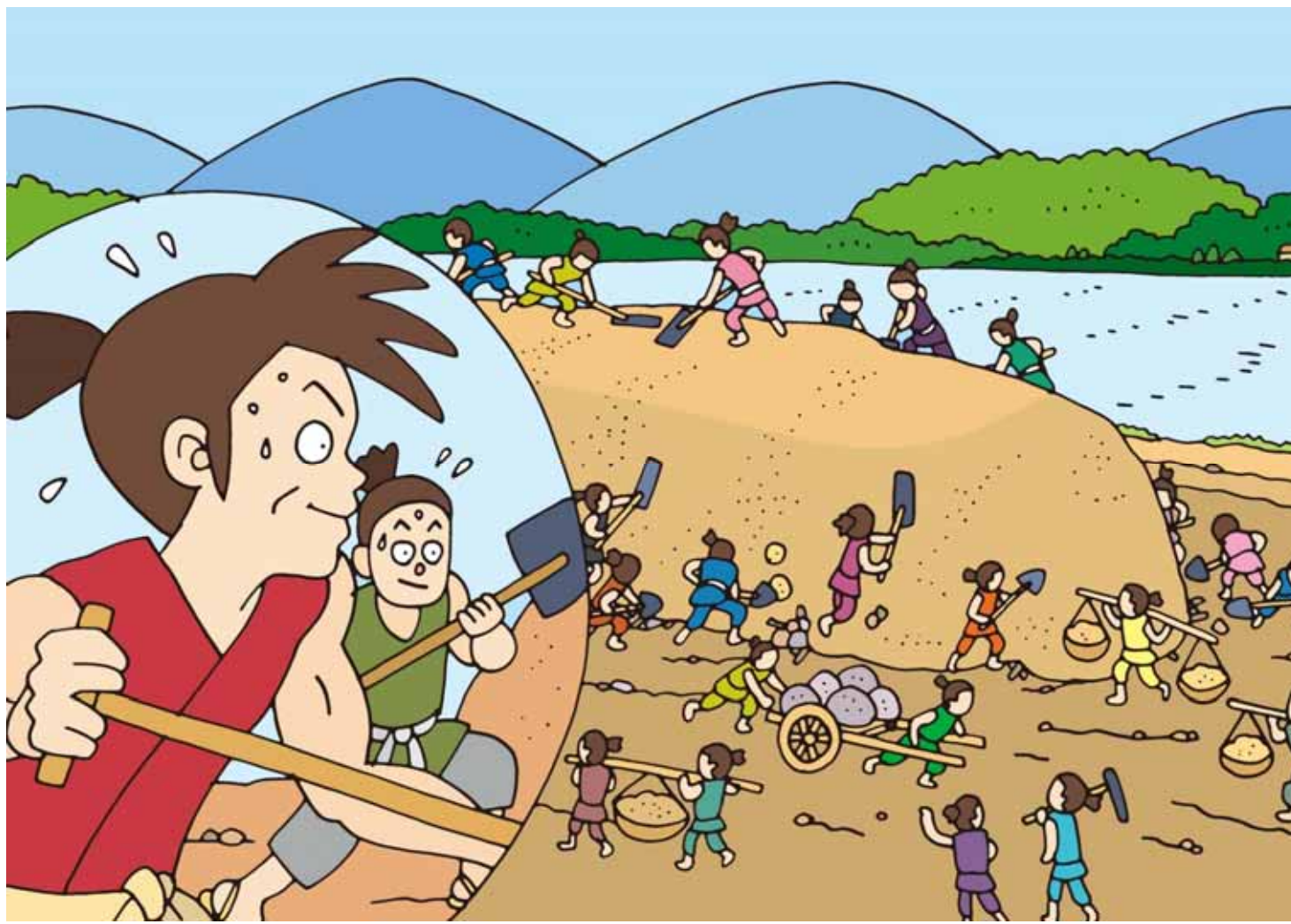
「身にあまる光栄です。がんばって工事をします。

ありがとうございます！」

【ナレーション】

長作は深く頭をさげ感謝しました。

長作堤防と開田



【ナレーション】

長作は四戸を名乗り、凶作で困っている農民たちを集め、堤防工事を始めました。

精米業でためておいた資金をおしみなく使い、働く農民たちに三度の食事と一日24文の給料を払いました。

そして、先頭になって農民たちと一緒に働き、笑い、常に希望を持ち、みなをはげまして毎日毎日作業を続けました。

【長作】

「みんな、この堤防が出来れば、米がたくさん作れるからな！がんばろう！」

【村人E】

「おー！」

【ナレーション】

農民たちも長作を信頼し、ついていったのでした。

長作堤防と開田



【村人F】

「さあさあ、じい様、乗ってげ！」

【ナレーション】

一日の作業が終わると、農民たちは長作をモッコに乗せ、作業道具を上にかざし、大名行列のまねごとをしながら、自分たちが作った堤防の上を歩いて来内川ほとりの長作の家まで送るのでした。

【村人G】

「下に寄れ～ わっははは

じい様、おちるなよ。わっははは」

【長作】

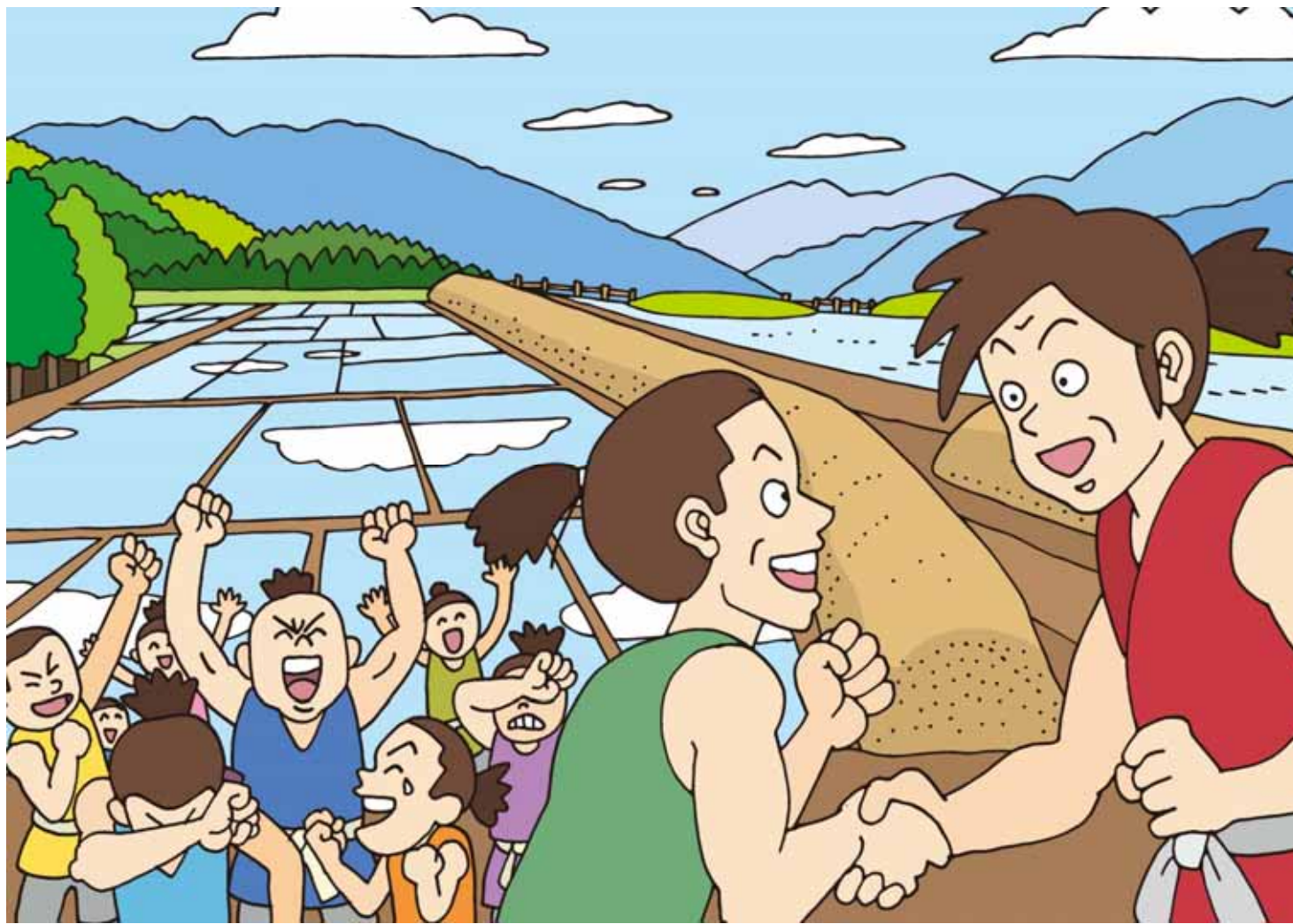
「おいおい、あまりゆらすな！わっははは」

【ナレーション】

彼らは、長作のことを親しみをこめて「じい様」と呼び、不平不満を言うことなく長年この工事で働いたそうです。

そして9年の月日が流れました。

長作堤防と開田



【ナレーション】

ついに堤防の完成です。

【村人A】

「やったー！じい様ついに完成した！」

【村人B】

「これで米が作れます。ありがとうございます！」

【長作】

「いやいや、皆のがんばりのおかげだ
本当によくやってくれた！ありがとう！」

【ナレーション】

長作も農民もみな泣いて喜びました。

これを「長作堤防」と呼び、じつに100メートルもの長さとなりました。

そして猿ヶ石川の水害は減り、荒地だったところには新しい田んぼが約6ヘクタールできあがり、たくさんの米を作ることができるようになりました。

【長作】

「よかった！これでみんなの食べ物が確保できるぞ。」

長作堤防と開田



【ナレーション】

長作が堤防の安全を祈願して建てた石碑は、今でも下組町に残っています。

のちに長作は、お殿様から開田の感謝として25石を与えられお侍さんの身分となりました。

彼はその後も来内川のそばに住み、生涯をすごしたということです。

おしまい